

病理診断部

1. スタッフ（平成22年4月1日現在）

科長（教授）福嶋 敬宜
 副科長（准教授）川井 俊郎
 医員（教授）仁木 利郎（兼務）
 （教授）田中 亨（兼務）
 （准教授）弘中 貢（兼務）
 （准教授）金井 信行（兼務）
 （学内准教授）山口 岳彦（兼務）
 （学内准教授）坂谷 貴司（兼務）
 （助教）河田 浩敏（兼務）
 （助教）松原 大祐（兼務）
 （助教）喜舎場由香（兼務）
 技師（副技師長）櫻井 達夫
 （主任）久保野幸子
 （主任）芳賀 美子
 ほか、技師 13名、事務員 2名

2. 病理診断部の特徴

病理診断部は、自治医科大学附属病院の中央施設部門に属し、自治医科大学附属病院および一部さいたま医療センター（腎生検の電子顕微鏡検索用検体）で採取された検体について生検診断、細胞診断、術中迅速診断、外科切除検体の病理診断、剖検診断などを行っている。

病理診断部では、提出されたすべての検体について病理医による適正な標本処理、必要十分な切り出し、病理検査技師による質の高い標本作製を行い、最終的に病理専門医による顕微鏡標本の観察を踏まえて病理診断を行っている。

また、必要に応じて免疫組織化学的検索、蛍光抗体法、電子顕微鏡検索、PCR解析を行い、複数の病理医による相互チェックを経て病理診断報告書を作成している。

診療における病理診断の関与が特に大きい消化器系、呼吸系を中心に、臨床病理合同カンファレンスを行い、病院の診療レベルの向上に寄与している。

病理診断部は、医学部および研修医教育の一部も担当している。医学部では、臨床病理カンファレンス(CPC) (M4、M5) 全18回を行い、必修BSL (M4)、選択必修BSL (M5、M6) の学生も受け入れて教育を行っている。

さらに、各科の研究支援の一環として、病理パラフィンブロックや組織スライドガラス標本の貸し出しや管理を行っている。

・施設認定

日本病理学会認定施設
 臨床細胞診学会認定施設

・認定医

日本病理学会専門医：福嶋 敬宜 ほか9名
 臨床細胞診専門医：福嶋 敬宜 ほか6名
 臨床細胞検査士：久保野幸子 ほか4名
 電子顕微鏡技術一般認定：二階堂貴章

3. 実績・クリニカルインディケーター

1) 病理診断件数の動向：

平成21年における生検診断は14,110件、細胞診は18,422件、術中迅速診断は757件、剖検診断は60件である。組織診は5年前の1.11倍と軽度増加にとどまるが、近年の縮小手術の増加に伴い1症例あたりの標本数の増加が目立ってきている。免疫組織化学は5年前の1.41倍と増加が目立つ。細胞診も3年前の1.09倍と軽度増加している。一方、剖検数は減少傾向にある。

2) 部門統計（2009年）

■病理組織診断件数：14,110件

標本ブロック数 68,912個

ヘマトキシリン・エオジン標本 136,159枚

特殊染色標本 30,584枚

■迅速診断：757件

■細胞診件数：18,422件、39,866枚

パパニコロー染色 35,528枚

特殊染色 2,593枚

免疫染色 51枚

<検体別の標本枚数>

婦人科関連 12,433枚

呼吸器 1,752枚

泌尿器 1,625枚

甲状腺 278枚

乳腺 242枚

消化器 238枚

リンパ節 187枚

他 555枚

■電子顕微鏡検索：248件

■免疫組織化学染色：1,279件、7,338枚

HercepTest件数：293件

ER&PR：298件

EGFR：41件、71枚

■蛍光抗体法検索：230件

■Insituhybridization法検索：38件、84枚

■FISH法検索：24件、43枚

■PCR法検索：64件

（結核・抗酸菌15、CDR 25、TCR 22、ほか）

■病理解剖診断：60件

3) 病理診断精度管理について：

組織検体の切り出しは、外科手術検体については病理医が行い、小手術検体や生検検体については、病理医と臨床検査技師が相互に検体と検査申込書を確認しながら共同で作業を行うようにしている。この切り出し作業時に、申込書と提出された検体に食い違いや不明の点がある場合には、その場で、検体を提出した医師に連絡を取り疑問点を明らかにしてから作業を再開するようにしている。

組織診断では、病理診断部医師2名によるダブルチェックを行い報告している。問題症例については、必ず、教授、准教授を含む複数の病理専門医によるチェックを行い、必要に応じて外部へのコンサルテーションも行っている。

免疫組織化学染色標本は、担当技師と病理医が、毎日、その日のすべての標本について、染色性の妥当性についてコントロール標本と比較しながら確認した後で診断医に渡すようにしている。

細胞診は、少しでも異常所見のある標本（クラスII以上）については全ての症例をスクリーナーと認定病理専門医とのディスカッションを経て、最終報告している。陰性例は、ランダムサンプルで10%以上の症例についてダブルチェックしている。

また、病理診断部医師と臨床医との連絡を密にし、問題例についてリアルタイムに相互の情報交換を行うようにしている。病理診断部に日常的に臨床医が訪れる環境を作るよう心がけている。

インシデント発生防止のためには、病理専属技師と病理医の連携も重要であり、毎週水曜日の午後1:30から病理診断部内の各部門責任者と部長・副部長・副技師長による連絡会を行い、部内のあらゆる問題を取り上げ、情報の共有と話し合いを行っている。また、毎月第1週目の木曜日午後5:15から部長と技師全員参加による病理診断部全体会議を行っている。さらに、病理医、技師への情報共有のためにほぼ毎週、eメール、回覧板によるお知らせを行っている。

4) 臨床病理カンファレンス

4-1) 剖検肉眼所見検討会：毎週水曜日午前9:00から、臨床担当医の参加のもと、剖検症例のマクロ所見の検討会を行っている。

4-2) 剖検症例ミクロ検討会：毎月第2・第4水曜日の午後5:00より開催している。

4-3) 研修医向け臨床病理カンファレンス (CPC)：卒後臨床研修センター主催で年4回行われる。

4-4) 教育型CPC：学生の臨床病理示説の講義時間にあわせ年間18回開催している。

4-5) 放射線科・病理カンファレンス：毎週金曜日午後5:00から放射線科カンファレンス室で行っている。

4-6) 呼吸器内科カンファレンス：毎週火曜日午前7:30から、病理医が参加し、必要に応じて症例の病

理像を解説している。

4-7) 消化器外科・内科・病理合同カンファレンス：2-3カ月に1回、水曜日午後6:00から開催している。

4-8) 骨・軟部放射線-病理カンファレンス：毎月第3火曜日午後6:00から、院外からの参加者とともに、組織所見を基に骨・軟部病変の画像診断の精度向上を図る目的で開催している。

4-9) 肝胆膵外科術前術後症例検討会：毎週火曜日午後7:30から。必要に応じて担当病理医が参加している。

4. 事業計画・来年の目標等

1) 業務向上（効率化、迅速化、質向上）：2009年10月から、現状の把握と具体案の提示を目的とした作業グループを部内に作って取り組んできているが、2010年は、他施設の視察も行い、一層の業務改善に取り組んでいく。

2) 新たな病理技術/システムへ取り組み：大学病院の病理診断部であり、現状の技術に満足することなく、病理診断を補助する技術の向上を行うため、継続的に新たな技術やシステムへの取り組みを行っていく予定である。この取り組みについても、積極的に部内で提案を出していくためグループを作って作業に当たっている。

3) 病理診断部からの情報発信：2009年11月に病理診断部ウェブ・サイトを全面的にリニューアルし、病理診断部での活動や実績報告を行うようにした。また、同時に紙媒体でのニューズレター (PATHO News) を発行し、病理診断業務について、関係科の方々に理解していただくよう努めてきた。今後も、継続して情報発信を行っていく予定である。このような取り組みは、学外からの人材確保や学内では検体提出時の不備の軽減に繋がるものと考えている。

4) 臨床各科-病理診断部との交流・情報交換の活性化：医療安全の面からも、医療の質の保証・向上の面からも、臨床科と病理部門との情報交換が重要である。マンパワーの問題はあるが、可能な限り、今後、新たな分野の臨床病理合同カンファレンスを立ち上げていく予定である。

5) 他施設病理部門との交流：さいたま医療センター、栃木県立がんセンターをはじめ、他施設病理部門との情報交換を積極的に行っていくことで、病理診断の質向上、各病変の診断基準の標準化を図っていきたい。

6) バーチャルスライドの活用：病理診断部に設置されている病理組織標本のデジタルスキャン装置は、一部の臨床病理カンファレンスで活用しているが、今後は、病理専門医教育、学生教育での活用を目的とした、教育的症例の取り込みとファイリングなどへの活用も計画している。

7) 病理検査室内の環境改善：昨年はホルマリン対策としてプッシュプル換気装置の設置を行っていただいたが、2010年はキシレン対策用の機器設置を行う予定に

なっている。

病理診断部連絡先：

電話 0285-58-7186、Fax 0285-44-8467

ウェブサイト：<http://www.jichi.ac.jp/pathology/>